

華雪 × 立命館 書と字の講座



本講座は、一字一字にそれぞれの物語を持つ漢字について、その成り立ちや由来を学び、実際に書くことを通して、より深く学ぶことを目的としています。

書家としての作品制作だけでなく、エッセイの執筆やワークショップといった分野でも活躍を続ける本学卒業生の華雪氏をメイン講師に迎え、漢字研究の権威として知られる白川静の研究成果を有する立命館の知をエッセンスとして加えたワークショップ型の講座です。立命館東京キャンパスにおいて、少人数制の講座として開講いたします。

全6回の講座、各回にテーマとなる一文字を設定し、各回異なる漢字を取り上げます。

会場 立命館 東京キャンパス (〒100-0005 東京都千代田区丸の内 1-7-12 サピアタワー 8階)
時間 15時00分～17時30分 (2時間半)
受講料 各回 6,000円 ※教材費・材料費含む
定員 8名 ※定員を大きく超えて申込があった場合、先着順に受講生を決定します
 ※最小開講人数 (4名) を下回った場合、開講しない場合があります

講師 華雪 (かせつ)
 書家。1975年、京都生まれ。92年より個展を中心に活動。
 〈文字を使った表現の可能性を探る〉ことを主題に、国内外でワークショップを開催。
 刊行物に「ATO 跡」(09.betweenbooks)、「書の棲処」(06.赤々舎)など。
 作家活動の他に、「コレクション 戦争 × 文学」(集英社)など書籍の題字なども手がける。

各回のテーマと字

～字の成り立ちから想起する 生き物と人との関係～

第1回 6/14(木) 「生」 草が地面から生え出るかたちを象る
 —古代の人々にとっての〈植物〉に対する感覚を想像する。

第2回 6/21(木) 「見」 “人”の上に“目”を大きく描くことで
 〈見る〉行為をあらわす
 —古代の人々が〈見る〉行為に感じていたことを想像することで、現代社会を生きるわたしたちにとっての〈見る〉感覚がいったいどのようなものかを考える。

第3回 6/28(木) 「想」 会えない人のことに思いを馳せる様子をあらわす
 —古代における人と人との関係、あるいは人々と植物の関係を連想させる「想」の字を学ぶことで、今を生きるわたしたちの感覚を確かめる。

第4回 7/5(木) 「手」 指をひらいた手のかたちを象る
 —古代の人々にとっての〈手〉、現代社会を生きるわたしたちにとっての〈手〉。同じようで違うのか、違うようで同じなのか、字を通じて考える。

第5回 7/12(木) 「芸」 人が苗木を植えようとする姿を象る
 —いまやあちらこちらで耳にするようになった「アート」や「芸術」といった言葉。それを古代の人々ははじめどのように捉えたのか。字を通じて、古代から現代を照らす。

第6回 7/19(木) 「笑」 巫女が手をかざし踊る様子を象る
 「笑」の字は「咲」の字に通じる
 —身近な字の成り立ちを知ること、古代の人々にとっての〈笑い〉を想像し、現在のわたしたちに繋がる感覚を考える。



【お問い合わせ・お申込み先】(受付時間：月～土曜日 9時～17時半)
 立命館東京キャンパス 公開講座事務局
 〒100-0005 東京都千代田区丸の内 1-7-12 サピアタワー 8F
 TEL：03-5224-8188 ※お電話でのお申込みはできません。
 FAX：03-5224-8189
 メール：tokyo-kz@st.ritsumeikan.ac.jp (公開講座専用)
 URL：http://www.ritsumeikan.ac.jp/tokyocampus/course_guide/



